

[書 評]

松田良孝著

『台湾疎開：「琉球難民」の1年11ヵ月』⁽¹⁾

平 山 陽 洋

はじめに

「日本最西端の碑」の建つ与那国島から西へと航行すると、やがて台湾島にたどりつく。与那国島から台湾島北東部の港町である蘇澳^{スアオ}までの距離はわずか111km。一方、与那国島から東に向かった場合、西表島や石垣島に到着する。与那国島から石垣島までの距離は117kmである。与那国島、西表島、石垣島を含む島々は八重山諸島と総称される。八重山諸島は沖縄本島よりも台湾島に近い場所にある。八重山諸島の北東には宮古諸島が連なり、宮古諸島からさらに北東に沖縄本島が位置する。石垣島から宮古島までは130kmほど、宮古島から沖縄本島までは300kmほどの距離である。

日本がアジア・太平洋戦争に敗れる以前、台湾は長らく日本の植民地支配下にあった。日本が日清戦争を経て下関条約で台湾を領有したのは1895年である。それ以降、帝国の南方拠点として台湾の開発が進み、開発の進展と並行して、多くの八重山諸島の人びとが求職や進学の目的で台湾に移住した。他方、台湾の人びとが八重山諸島に渡り、水牛による農地耕作技術やパイン産業をもたらした。島々の地理的な近さにも所以して、1945年以前に八重山諸島と台湾のあいだで人びとの往来が推進され、島々のネットワークは強固になっていった。

そうしたネットワーク形成の歴史的背景があったうえで、アジア・太平洋戦争末期の1944年に、八重山諸島や宮古諸島の人びとの台湾疎開が実施される。サイパンで日本軍が全滅した同年7月7日夜に開かれた日本政府の緊急閣議において、沖縄本島から本土へ8万人を疎開させるとともに、宮古島、石垣島から台湾へ2万人を疎開させることが決定された。対象者は老幼婦女子とされた。

1944年の夏以降、実際には1万人ほどが台湾に渡った。戦争末期で米英軍が制海権を事実上掌握しており、危険な海越えだったとはいえ、当時、八重山諸島と台湾のあいだに国境はなかった。その状況は日本の敗戦に伴い一変する。台湾に疎開した人びとは、新たに出現した国境を越え、故郷の島々に戻る方途を模索した。

(1) 松田良孝『台湾疎開：「琉球難民」の1年11ヵ月』南山舎、2010年。

本年6月に上梓された『台湾疎開：「琉球難民」の1年11ヵ月』のなかで中心的に叙述されているのは、八重山諸島の人びとの台湾疎開をめぐる苦難の歴史である。副題にある「1年11ヵ月」とは、疎開の閣議決定から引揚終了までの時間を意味する。本書は、このおよそ2年のあいだに、台湾に疎開した八重山諸島の人びとの生がどのように翻弄されたか、という問題に読者の関心を向けさせる。あわせて、台湾疎開とは全体として、いったいどういう歴史的出来事だったのか、という問いに向きあわせる。さらに、戦争の進展と終結、統治主体の転換、国境の出現、冷戦の開始という一連の歴史的転換の意味とはなにかという重い問題を、再考する契機を提供してくれる。

なお、本書のもととなったのは、八重山毎日新聞の記者である著者が同紙に発表した連載記事「生還一ひもじくて“八重山難民”の証言」である。この記事で著者は、2010年の第14回新聞労連ジャーナリスト大賞を受賞している。

1. 本書の構成と内容

本書は、「第1部 疎開」、「第2部 疎開地を訪ねてみる」、「第3部 疎開者帰還船の運航と台湾沖繩同郷会連合会」から成る。本書の大部分を占める第1部では、1944年の9月から10月にかけて石垣島から台湾に疎開し、1945年冬から翌春にかけて帰還した3人の人物の体験が、時系列にそって叙述される。それぞれの人物がインタビュアーの著者に対して語った言葉の数々が、叙述のなかに効果的に差しはさまれる。読者は頁を繰るごとに、3人を取り巻く状況が刻々と変化する様子と、彼、彼女たちの考えや感覚の動きをリアルに追体験できる。

3人の人物とは、2人の妹と1人の弟の保護者として台湾に渡った^{なかなだかり}仲村渠(現姓石堂^{いしどう})ミツ(1927年生)、石垣国民学校高等科1年在籍時に妹を連れて疎開した^{おおたけひろし}大嵩浩(1931年生)、満1歳になったばかりの娘を抱えて疎開した^{とくやましずこ}徳山静子(1918年生)、である。仲村渠ミツの疎開先は台湾北部の^{ロンタン}龍潭、大嵩浩と徳山静子の疎開先は台湾南西部の^{シンイン}新宮だった。

著者は第1部の冒頭部分に、疎開する前後の時点での台湾に対する感覚の世代差に関する説明を据えている。例えば、石垣尋常高等小学校尋常科卒業後、自宅で家事や農業の手伝いに従事していた10代後半の仲村渠ミツにとって、台湾疎開とは、「いなか」の石垣島を離れて「都会に行けるというあこがれがありました」と回顧されるような「楽しみ」なことだった(31-32頁)。一方、10代前半とより若かった大嵩浩の場合、学校の生徒たちと「戦争に勝つまで向こうで我慢しよう」と確認しあった事実から理解されるように、不安を感じながらそれを打ち消す「我慢」という感覚が強く、都会への「あこがれ」が勝るといふ心境にはならなかった(38-39頁)。もともと、その彼も、疎開船が^{ジーロン}基隆の港に到着した際には、そこに浮かぶ2、3万トン級の巨大な船を目の当たりに

し、都会としての台湾の姿に驚かされる。他方、幼子をつれた母親である徳山静子の場合には、「台湾を見たいというような気持ちではなく」、戦争に対する不安の感情がより強く心を縛った(41頁)。

異なる世代感覚とともに始まった3人の疎開生活は、しかし、続けて叙述されるように、その後いずれも苦難の道筋をたどる。その叙述において示唆されているのは、それぞれの苦難の体験に、疎開先の地域差ゆえの相違が現われたことである。と同時に、疎開先の違いに関わらず、共通した困難に直面したことも示される。

大嵩浩と徳山静子が疎開した新営は、疎開の時点ですでに安全な場所ではなかった。彼、彼女は、空襲による死の恐怖と防空壕への避難を体験し、台湾中南部の別の場所への2次疎開を余儀なくされた。2次疎開先に空襲はなかったが、台湾中南部はマラリア罹患の危険性の高い地域であり、大嵩浩と妹はやがて病身となった。一方、仲村渠ミツの疎開した台湾北部の龍潭には空襲がなく、2次疎開の必要性は生じなかった。そこにはマラリアもなかった。しかし、彼女と弟妹は、行政の支援が十分でないなか、食糧調達の困難による衰弱に常に悩まされた。そしてこの、食糧をいかに入手し、生き抜くかという問題は、疎開生活のあいだ一貫して、3人が共通して直面したものであった。

やがて日本は敗戦を迎えた。3人を取りまく敗戦後の状況もまた、丁寧に再現されていく。敗戦処理の一環として行政による疎開者帰還が本格化したのは1945年冬であるが、それ以前に、3人を含めた個々の疎開者たちを、故郷の家族や親類縁者が迎えに訪れた。疎開者たちはそれぞれ列車を乗り継ぐなどして基隆や蘇澳に移動し、そこで故郷の島々に戻る船を待った。

帰還までのあいだ、台湾社会における疎開者たちの立場は微妙なものだった。大嵩浩の回想によると、敗戦により民族の序列が逆転し、台湾人は台湾人を「一等国民、二等国民が琉球人、本土の人は三等国民」と考えたという(140頁)。疎開者を含めた「琉球人」の場合、本土出身者と比して報復の対象となる事例は少なかったとはいえ、身の安全が保障されたわけでもなかった。仲村渠ミツの場合、列車のなかで台湾人に窓の外に投げ出されそうになるという体験をしている。しかし、その彼女を救ったのも台湾人だった。

3人はみな、蘇澳から八重山諸島に帰還した。行政の認可のないヤミ船として島々を往来していた漁船が、海を越えて彼、彼女たちを運び、1年数ヵ月ぶりに故郷の土を踏むことを可能にした。しかし、故郷の島で3人を待っていたのは、食糧が不足し、マラリアの流行する状況だった。疎開は終わったが、3人の生活が落ち着いたわけではなかったのである。台湾疎開のそうした後日譚に言及し、その後の彼らの生活も平坦ではないことを示唆しながら、本書第1部の幕は閉じる。

著者は以上のように、インタビューから得た情報を再構成しつつ、3人の台湾疎開の個人史を詳らかに叙述している。あわせて、それら個人史を補強する工夫も忘れない。本文では適宜、事実関連の情報が補足され、例えば、台湾疎開者1万人ほどのうち宮古諸島出身者が約5,000人であり、八重山諸島出身者が2,500～3,000人であるという推計数値や、台湾疎開をめぐる軍の動向、行政による生活支援の実態、戦争の進展に伴う空襲の激化、マラリア被害の深刻化、疎開者の死亡率の高さ、日本敗戦後の行政の機能停止、民間組織による疎開者救済の動き、敗戦から数ヵ月のタイムラグがあったうえでの行政による疎開者救済の本格化、などの情報が提示される。それらの情報は、当時の公文書や行政刊行物、後年に編纂された沖縄や台湾の地方自治体史、台湾人の残した日記、個人の回想録などを掘り起こし、網羅的に検証して導かれたものである。読者は、こうした諸々の情報により、3人の個人史を追体験しながらも、台湾疎開の全体像を立体的に把握できる。

また、当時の様子を知る台湾人へのインタビューから得られた情報も数多く配され、疎開者たちが直面した生活の困難を浮き彫りにする。例えば、マラリア罹患時にバナナを食べてはいけないという台湾のローカルな知識をもたなかった疎開者が、食糧不足ゆえに多量のバナナを口にし、マラリアに蝕まれ命を落とした話などが記録されている。

以上のような第1部の内容をふまえて、第2部では、3人が疎開した龍潭と新営、蘇澳にある漁港の南方澳^{ナンファンアオ}など、6ヵ所の疎開地の現在の姿が紹介されている。そこでは、疎開者の居住地や防空壕、通った学校の現状などが簡潔に説明されており、さらに、街路地図や写真が添えられている。電車やバスを使ったそれぞれの街への行き方も付されており、読者は本書を手し、かつての疎開地を実際に訪れ、街に残された疎開の歴史の痕跡をたどることもできる。

第3部は、「台湾沖縄同郷会連合会」という組織により1946年2月に発行された、ある人物が「沖縄籍民タルコトヲ證ス」という内容の一片の証明書の紹介から始まる。そして、日本敗戦後の台湾で同連合会が果たした役割と、証明書発行の経緯の再構成が試みられる。

沖縄出身の名士により同連合会が結成されたのは、1945年の10月から11月にかけてのことだった。同会は、マラリアと飢えに苦しむ疎開者の生活を改善し、故郷への送還を実現し、さらに、食糧の不足する送還先での生活を支援するため、義援金を募るなどの疎開者救援活動を展開した。あわせて、台湾の行政当局に働きかけ、会の活動への理解と協力を求めた。日本の敗戦の後、中華民国は台北に台湾省行政長官公署を設置しており、1945年12月には同公署のもとに、在台湾の日本人を管理する日僑管理委員会を設けた。

台湾当局は当初、疎開者を含む台湾在住の日本人に関して、沖縄の人間と本土の人間の区別なく、全員を本土に送還する計画だった。しかし、台湾沖縄同郷会連合会の働きかけにより、沖縄への入域に関して米軍の許可が下りるまで、沖縄の人間を「琉僑」として扱い、台湾に留まることを認可した。その際に台湾当局は、本土の人間が「琉僑」と誤認され

る事態を避けるため、同連合会に「琉僑」の把握と情報提供を求めた。本書では、こうした交渉があったうえで、「沖縄籍民タルコトヲ證ス」証明書が発行されたのではないかという推察が示される。

証明書発行の前後の時期とは、「琉僑」の送還計画が具体化したときでもあった。台湾省行政長官公署が最終的に「遣回琉球難民辦法」（沖縄疎開者帰還規則）を策定したのは1945年の年末ごろである。その策定に至るまで、「琉僑」送還をめぐり、台湾沖縄同郷会連合会、台湾行政当局といったアクター以外にも、降伏の後に台湾地区日本官兵善後連絡部に改組された旧日本軍の第10方面軍や、沖縄の新たな占領者たる米軍、あるいは、八重山諸島や宮古諸島の行政関係者の複合的な関与があったことが示される。

諸々の折衝の結果として台湾当局が帰還船を用意したことを受け、1946年の3月から5月にかけて、八重山、宮古関係者の引揚が完了した。他方、沖縄本島出身者の引揚は、米軍による占領との兼ね合いもあり、同年10月を待たねばならなかった。第3部の最後に示されるこの結末に、読者は、沖縄における「戦後」の始まり方の地域差を読みとることもできるだろう。

2. 本書の評価

『沖縄タイムス』や『琉球新報』に掲載された書評で指摘されるように、本書の第1の意義は、これまで詳細のほとんど知られていない台湾疎開の実態を明らかにした点にある⁽²⁾。本書評で確認したように、その解明の手腕は確かなものであり、読者は、つぶさに再構成される八重山諸島出身の3人の疎開者の個人史と、丁寧に考証、復元される個人を取り巻く歴史状況の双方から、台湾疎開という歴史的出来事の全体像を立体的に把握することができる。そして読者は、八重山諸島や宮古諸島にとっての戦争の終わりと「戦後」の始まりの一局面として、台湾疎開の歴史があることを認識させられる。

第2の意義は、本書によって開示される問題領域に関わっている。すなわち、1945年の敗戦を経て日本の国境が引きなおされた歴史の再考を、本書が促す点である。沖縄の歴史家の屋嘉比収によると、台湾疎開者の引揚救済を目指した民間組織の活動は、まもなく、台湾、香港、八重山諸島、宮古諸島、沖縄本島、日本本土と連なる、生活維持のための密貿易のネットワークの土台となった。密貿易を促したのは、戦後の沖縄における物資窮乏の状況だった。敗戦に伴い国境が出現したにもかかわらず、国境管理という行政の機能が、実態としては働いていなかったのである⁽³⁾。

(2) 松田修一「民衆の視点で国・国境問う」『沖縄タイムス』2010年6月26日；三木健「集団疎開の厳しき描く」『琉球新報』2010年6月27日。

(3) 屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』世織書房、2009年、322-328頁。ベトナム現代史を専門とする評者の立場からするならば、この非合法の海上交易のネットワークが、台

屋嘉比は、1940年代末から1950年代初頭にかけての冷戦対立の深化と並行して、米軍により国境管理が強化されたことを受けて、密貿易による人とモノの流れを遮断、統制する線として、日本南西の国境が実体化していったと指摘する。屋嘉比はその実体化を「『国境』の顕現」と呼んだ⁽⁴⁾。「国境」が「顕現」するあいだに起こったのは、中国における国共内戦、国民党政府の台湾への撤退、朝鮮戦争の勃発といった、東アジアへの冷戦の波及を印づける歴史的出来事の数々だった。そして、米国による東アジア、アジア太平洋地域の地域秩序構想に日本を組み込む文脈で、1951年にサンフランシスコ平和条約が締結される⁽⁵⁾。

このように考えた場合に、本書の終着点は、戦後日本における「『国境』の顕現」の歴史の出発点であると解釈できる。本書に関して欲をいうなら、台湾疎開の引揚から密貿易へと連なる海のネットワークがあったこと、そしてそのネットワークが、冷戦の深化に伴う国境管理の強化により遮断されたこと、そうした一連の歴史の流れへの言及があれば、と感じる。しかし、台湾疎開という、短いながらも濃密な歴史的時間を丹念に再構成した本書に対し、そこまで求めるのは無理であろう。むしろ大事なのは、読者が本書をどう受けとめ、台湾疎開から連なる歴史をいかに想像しなおすか、である。読者の歴史的想像力を刺激する魅力を、本書は十分に備えている。

湾や香港の西側に、どのように伸びていたかという問題に関心を引かれる。ベトナムの共産主義者がフランスに対し武力闘争を遂行するために重要だったのは軍用物資の調達であったが、その調達のうえで、香港、海南島からベトナムの北部や中部に伸びる海の交易ネットワークが大きな役割を果たした事実が指摘されている。Christopher Goscha, *Thailand and the Southeast Asian Networks of the Vietnamese Revolution, 1885-1954* (London and New York: Routledge, 1999), pp. 196-205.

(4) 屋嘉比取『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす』(前注3参照)、233-264頁。

(5) 同条約の内容や締結までの経緯の詳しい検討として、原貴美恵『サンフランシスコ平和条約の盲点：アジア太平洋地域の冷戦と「戦後未解決の諸問題」』溪水社、2005年、を参照。